令和4年度　学校評価総括表　伊丹市立さくらだいこども園

教育保育目標	自分が好き・人が好き・遊ぶのが大好きな子どもを育む
重点目標	（１）子どもと保育者が創り出す遊びや生活を大事にした保育の実践に努める （２）家庭、地域から信頼できるこども園づくりに努める

項目		重点項目	具体的施策	達成目標	中間ふりかえり	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
学力の向上	基礎基本の徹底と学ぶ力の向上	・安定した生活のリズムを確立する。 ・基本的生活習慣が身につくようにする。	・子供が自分の体に興味関心をもち、基本的生活習慣を身につけられるように、園全体で取り組む。 ・個々の生活や基本的生活習慣の実態を把握し、登降園時や連絡ノート、クラスだよりなどを活用して各家庭に啓発する。	・生活の中で子供一人一人の実態に応じて継続して支援を行う。また、幼児クラスは月に１回程度ほけんの話を保育に取り入れ、保護者にも指導の内容を降園時やおたより等で伝える。 ・連絡ノート（乳児）や連絡帳（幼児）、登降園時に保護者と共有し、啓発する。 ・保護者に啓発する際には、保護者が取り組みやすい方法を具体的に伝えていく。	・着替え、身辺整理、食事、排泄など、子どもの課題に応じた支援を行っている。主に降園時に保護者と園や家庭での姿を共有し、協力しながら支えていけるように努めている。 ・ほけんの話を月１回取り入れることができている。降園時にほけんの話の内容を伝えることで保護者にも内容を理解してもらう機会をもっている。	B	・子どもの生活習慣や身辺自立が身に付くように、担任間や職員間で共通理解をしながら個々の姿に配慮し、支援を行った。 ・降園時に直接伝えたり、連絡ノートや連絡帳を活用したりし、保護者に子どもの姿や課題、取り組みやすい方法等を積極的に伝えることができた。 ・乳児クラスでは、子ども達が安定した情緒のもとで、保育者が受情豊かに、応答的な関わりのもと、日々の生活を丁寧に関わる事に努めた。 ・幼児クラスでは月に１回ほけんの話を保育に取り入れ、定期的に子どもが自分の体や生活習慣について知る機会を設けることができた。また、降園時にほけんの内容を伝えたりHPに話の内容を更新したり、ほけんだよりを配信したりし、保護者に啓発することができた。	・ホームページや配信している手紙を見ている保護者にははけんの話の内容を伝えることができているが、見ることができていない保護者、一斉の降園連絡ができない２・３号認定児の保護者には保育者が意識して個別に声を掛けたり、玄関に近い場所に教材を見る事ができる場を作ったり等、啓発の工夫が必要。	・安定した生活リズム、基本的生活習慣が身に付くよう、今後も一人一人の状況を把握し、個々に応じて柔軟に対応していく。 ・保護者に寄り添い、子育てを共にすすめていく姿勢を今後も大切にする。
	主体性の尊重	・主体性を育むための保育を創造する。	・教育、保育の計画時に子どもの主体性を育む保育を進めていく為に大切にしたいことについて話し合いの場をもち、実践をする。	・生活や遊びの中での子どもの姿で気付いたことのメモや写真の記録を持ちより、子どもの理解を深める場を学年で２週に１度もつ。 ・読み合った記録を通して、子どもとの関わりを振り返り、省察し、月に１度環境構成を話し合う場をもつ。	・環境構成では、楽を出し合うことはあるが、まとまって準備することが難しい。役割をしっかり分担してすすめるべきと感じる。 ・クラスで子どものことについて気付いたことを話したり、情報共有をしている学年全体での話し合いがなかなかできていない。話し合い後に報告という形になってしまっている。	B	・幼児会議や乳児会議など月１回程度クラスの子ども達の様子を伝え合ったり、遊びの姿を写真を通して語り合ったりする機会をもった。 ・環境構成では、担当を決め園庭の環境や保育室の環境を計画し、進めていった。 ・子どもの興味・関心に応じた環境を話し合い、子ども達が主体的に遊ぶ環境構成を行えた。また、さらに子どもの姿を見て再構成を行うこともできた。	・幼児会議や乳児会議で伝え合えるように子どもの様子について、議題として計画をする。前もってテーマを決めたり内容をまとめておくようにする。 ・環境構成の担当を決めておくことで、計画的に実践できる為、時期や遊びの内容から担当を決めておくことが必要である。 ・ドキュメンテーションやクラスだよりなどから子どもの姿を読み取り、環境構成に活用する。	・園児の主体性を尊重する保育活動のあり方について職員皆で学びあいと共有を今後も継続していく。 ・子ども一人一人に応じた、環境構成や保育者の関わりについてふりかえり、向上に努めることが必要。
	保育者の保育力向上	・全職員で保育について学び合う。	・研究テーマを「一人一人の心の動きを大切にする保育をめざして」とし、子どもの不安や気持ちや声感いを受け止める保育者の関わりや、やってみよう、試してみようという意欲につながる環境の構成をする。 ・日々の教育・保育を振り返り、語り合いながら考え、実践する。	・月１回（クラスが保育を公開し、学び合う機会をもつ。 ・全職員が参加する月１回の職員会議後に、テーマに沿って語り合い、学び合う場をもつ。 ・職員アンケートの「研究テーマに基づき、職員同士の語り合いを大切にした園内研修を行っている」でA・B合わせた回答が85%を超える。	・月１回の保育公開や、職員会議後の語り合いを実施し、学び合うことができた。 ・語り合いでは、日々の保育の悩みをざっくばらんに語り合ったり、エピソード記述を基に、感じた事や、自分ならどう関わるか、どのような環境を準備するかという具体的な事を語り合ったりした。それにより、自分の考えを他の保育者に伝わる様に話すスキルアップにもつながった。 ・職員アンケートでは、A・B合わせた回答が90%を超えた。	A	・月１回の保育公開とエピソード研修・職員の語り合いの会は来年度も継続したい。 ・エピソードは、１月末のこ幼保小接続研修で書き方を変更した。年度途中の変更になったので、変更後の書き方で来年度も継続し、検証したい。	・引き続き、様々な職種の職員皆で共有しあいながら、チームでの教育保育力向上を目指す。
豊かな心・健やかな体	ゆたかな心の育み	・自分を大切にする心や思いやりの心を育む。	・自分を大切にしたり、思いやる心が育まれたりできるように、子ども一人一人と愛情深くかかわる。 ・一人一人の個性を認め合い、子どもの気持ちや考えを尊重する保育を実践する。 ・日々の姿を共有し、ゆたかな心を育むための環境の構成を行う。	・毎日の日誌や短期案で子どもの姿を明記し、会議の中でこども理解を深めていく。 ・エピソードをもちより、職員同士で共有していく。 ・月２回の学年会議の中で子どもの実態や保育計画から、自然や生き物、異年齢の関わりを計画的に取り入れていく。	・ゆっくり集まって話をする時間はないが、休憩時間や短い時間で子どもの姿や支援方法を確認したりしている。 ・幼児・乳児会議は定期的に実施し、保育・環境構成の共有を行うことが出来ている。学年会議は取ることが難しい。各学年助け合い、実施できるようにしていく。	B	・毎日の日誌、短期案や個人指導計画（乳児）、会議等の中で子ども理解を深め、支援方法や環境構成の改善に取り組むことが、一人一人に受情深く関わることにつながった。 ・既刊教やエピソード研修を通して、一人一人が保育を見直し子どもの気持ち、心に寄り添う保育に取り組んだ。 ・戸外遊びの時間や身体測定など計画的に異年齢の関わりを大切にすることができた。	・全体で集まる機会を取ることは難しいが、PCの共有フォルダーや書面、休憩時間等を利用して子どもの育ちや支援を考えていく。 ・引き続き、子ども理解を深め、子どもの気持ち・心に寄り添う教育保育に努めていく。	・保育者同士が子どもの育ちを見守り、皆で成長を喜びあいながら、一日一日を大切に、丁寧な関わりを行う。
	健やかな体づくり	・自ら体を動かして遊ぼうとする子どもを育てる。	・自ら体を動かしたくなるような園庭環境を準備するとともに、毎日戸外遊びの時間を設ける。 ・季節に応じた栽培の計画を立て保育に取り入れる。 ・日々の給食の中で様々な味を味わう経験を積む（一口食べてみようとする）	・アンケート項目で「子どもは、運動遊びや戸外遊びを通して体力が育っている」の肯定的な回答が８０％以上になる。 ・年に２回のクッキングの機会をもつ。 ・苦手なものも一口食べてみようとする。	・定期的に環境を見直し、子どもの遊びたくなるような環境を整えている。各学年で調整し、戸外遊びを行っている。 ・１１月３０日に２回目のクッキングを予定している。 ・給食を食べる時間を十分に確保し、個別に対応している。	A	・保護者アンケートにおいて、A・B合わせた割合が95%以上であった。 ・戸外遊びを日々十分に行う事ができた。 ・１学期と２学期に１回ずつクッキングの機会をもち、子ども達がみんなで作ったものを美味しく食べることができた。 ・給食の中で苦手だと思うものも１口は食べてみる経験を積むことで、美味しく食べられる食材が増えた子が増えた。	・担当者を中心に園庭の環境構成を考えて遊びを用意してきたが、話し合いの時間の確保が難しかった。担当者だけでなく、担任全員が子どもの姿を捉えながら環境構成を考えていく意識をもつように努めていく。	・体作りの必要性を理解し、発達年齢に沿った教育保育について、今後も計画的に進めていく。
開かれ信頼される学校園	拠点園としての役割の遂行	・拠点園として、Bブロックの研究研修、こ保幼小連携、にじいろ保育を牽引する。	・にじいろ広場、園内研修等の参加を各施設に呼びかける。 ・インクルーシブ遊具や用具、図書等の整備及び貸出しを行う。 ・小学校と連携しながら、交流や情報交換等を行う。	・Bブロック拠点園として、年１０回のにいろ広場や年３回研修の参加を呼びかける。 ・インクルーシブ遊具や用具や図書を、他施設に貸し出しの案内をする。 ・ホームページから活動内容等を発信し、啓発する。 ・小学校の校舎やプール、図書室等に行く日程を設ける。	・毎月のにいろ広場、および現在２度の研修会を開催している。 ・遊具の紹介は配布プリント等で積極的に行っている。 ・ホームページでの紹介も定期的に行われている。 ・小学校教諭と１度交流会を行っている。今後も他施設も一招いた交流会を予定している。	A	・年１０回のにいろ広場と年４回の研修を実施することができた。 ・４・５歳児は５月から、３歳児は９月から毎月にいろ広場を開催している。私立園職員の見学が２回あった。保護者研修会は４・５歳児の保護者対象に年２回開催した。Bブロックに研修を年４回呼びかけた。 ・図書や遊具の貸し出しはHPを作り、行っている。貸し出し図書の職員の利用があった。 ・小学校と連携しながら、計画的にプールや図書室見学などを実施できた。	・拠点園として実施する研修に参加校園所を増やしていきたい。 ・遊具の貸し出しの利用はなかったため、HP以外にもメール等でBブロックの就学前施設に知らせていく。 ・こ幼保小接続研修は、引き続き拠点園として率先して行えるようにする。また今後は、相互の教育内容や方法に関する理解の共有を目指す。	・今後もインクルーシブ保育、幼小接続、保育研修を計画的にすすめていく。
	積極的な園情報の発信	・園の教育活動の情報発信をする。	・保育活動や行事の様子、施設やにいろ広場の活動等を地域に公開する。 ・紙面やホームページ等を通してお知らせや現在の様子を発信する。	・掲示板やホームページで教育保育活動を紹介する。また園庭開放や月２回以上の施設見学を行う。 ・園だよりやクラスだより、保健だより等を月１回発行する。また年３回保育参観等で保育の公開をする。	・ホームページの更新については、週に１度の更新が遅れてしまう事がある為、担当がその都度声かけをしている。 ・ホームページ等を通して園の様子や研修の様子など園の情報を写真を多く取り入れながら配信するようにしている。	B	・ホームページの更新は週に一度の間隔で行う事ができていた。遅れてしまう事もあったが、園務日程に載せて、各学年が意識して取り組めるようにした。	・引き続き園務日程にホームページ更新の学年や締め切り日を記載する等明確化の継続と、地域の方へ発信する意識の再確認が必要。 ・ホームページの工夫については先進国の状況等を参考にし検討する。 ・動画配信についても園全体で取り組む。	・次年度は動画配信も検討する等、様々なツールを用いて、園の教育保育を発信、アピールしていく必要がある。
	安全・安心な園づくり	・職員の危機管理意識を高める。	・様々な場面を想定した避難訓練を計画的に行うと共に、毎月２回安全点検を実施する。 ・インシデント・アクシデントの報告と検証を行い、再発防止に努められるように共有を図る。 ・登降園時に園児を安全に保護者に引き渡す。	・月に１度様々な災害を想定した避難訓練を行い、緊急時の対応の仕方や連携体制を整える。毎月２度安全点検を行う。 ・園内リスクを毎月開き、園内及び園外のリスク事案について検証し、職員会議や伝達ノートで全職員に周知する。 ・リスクマップを掲示し、新たに気を付けるべき箇所が出た時には追記し、見直しを図る。 ・特に人の出入り が集中する時間帯は玄関に職員が付いて見守り、園児を保護者へ確実に引き渡すように連携体制を整える。	・避難訓練は、毎月の担当が計画通り実施できている。 ・安全点検の際は、各部屋の担任への声かけもあり、危険な所がないか、確認しあいながら進められている。 ・特に気を付けなければならない事案を取り上げたりしながら、具体的に伝達や検証が、リスク会議や伝達ノート、回覧等で周知されている。しかし、リスク会議に出席できない職員の意識改善が必要。 ・リスクマップは、担当が中心に作成見直しが予定通り行われている。 ・１号認定の登降園への配慮や見守りは徹底されている。ただ２・３号認定児は登降園時間にバラつきがあるため、見守り、声かけ及び周知が必要である。	B	・避難訓練及び毎月２回の安全点検は計画的に実施できた。避難訓練については様々な場面を想定し、その時々に応じた職員間の動きを確認、連携して行うことができた。 ・リスク会議には全職員が一度は参加し、内容についても書面や連絡で共有しあうことができた。起こりうるリスクに対する心構えができたものの、周知が不十分で現場で活かしきる事前対応が万全ではなかった点については課題である。 ・リスクマップは担当者を中心に追記していくことができた。また、職員会議でも見直しを図ることができた。 ・登降園時は職員が必要な場所に付いて見守りや声掛けを行った。２・３号認定児への配慮は玄関担当の職員が意識をもって受け入れ、見送りを確実に行った。	・一人一人の意識改善・保育に対するスキルをアップしていくために、園内リスクに参加する回数が増えるように日程調整をより良い日に設定していく。 ・園内でのインシデント・アクシデントが起こった時には、関わった職員を中心に検証すると共に、職員会議でも担当者より全職員に口頭で周知徹底し、意識改善を図っていく。	・避難訓練、リスク研修等の内容を再度見直し、職員皆で安全安心なことを園づくりに努める。
	子育て支援の推進	・地域の「幼児教育センター」としての役割や機能を充実させる。	・むっくむっくルームと連携しながら運営する。 ・就労家庭支援、育児相談等の育児支援を行う。 ・親子や地域の交流の場としての園庭開放を行う。	・むっくむっくルームと連携を行い地域の子育て支援を行う。 ・１号認定こども家庭に対し、月２０日以上の預かり保育の実施をする。 ・年末年始お盆以外、広く地域に園庭を開放する。	・むっくむっくルームに通うお子さんについて、情報を共有しあいながら家庭支援を行っている。 ・預かり保育は希望者を多く、予定通り実施されている。 ・園庭開放は、１号認定降園時の利用が多く、保護者同士の交流、情報交換の場となっている。	B	・むっくむっくルームの職員と情報を共有しあいながら、互いに子どもや保護者への対応を共有して行うことができた。今後、更なる柔軟なつながりを目指す。 ・預かり保育は、月２０日以上、１日約２０人以上１年を通して利用があった。 ・降園時に保護者同士が情報交換、交流の場として、園庭を活用することができていた。	・むっくむっくルームの職員とは日頃から声を掛け合う事を意識し、今まで以上に柔軟に対応しあえる関係を続けていく。 ・今後は、園児や地域の保護者の方と今まで以上に積極的な話しかけ等を行い、更なる育児支援に努める。	・むっくむっくルームと繋がりあいながら、地域の子どもたちの育ちを支援していけるよう努めていくことが課題。
インクルーシブ教育保育の推進・充実	インクルーシブ教育保育の推進	・個別に支援が必要な園児の育ちに応じて適切な支援を行う。	・個別な支援を必要とする園児の情報交換を行い、職員間で共通理解を図る。また共通認識のもとで支援を行う。 ・担任と担当で連携し、個別指導計画を作成する。 ・巡回相談や専門機関、外部機関との連携を図る。 ・にじいろ広場を開催する。広場を通してブロックの園と情報交換を行う。 ・インクルーシブ教育・保育について学習を深める。	・その都度、学年で支援のあり方について話し合う。 ・年３回、個別指導計画の作成・評価は子どもの育ちを保護者と共有する。 ・月２回発達支援センターからの巡回相談を活用して子ども理解を深める。 ・年１回インクルーシブ教育・保育について学習会を開催する。 ・保護者支援について共通理解を深め、支援していく。	・職員同士での支援についての話しあい、個別指導計画の作成は予定通り進んでいる。 ・保護者研修会を年２回開催した。 ・私立園の見学が２回行われた。 ・伊丹特支コンサルテーションを活用し、にいろ広場でのよりよい支援について学んだ。 ・各学年でその都度相談、調整しながら進めているが、更なる担当者全体の共通理解を図ることを目指す。	B	・職員同士での支援についての話し合い、個別指導計画の作成は予定通り進めることができた。 ・個別指導計画の作成・評価は学期に一回ずつ、計画３回保護者と共有した。 ・月２回発達支援センターからの巡回相談を活用して子ども理解を深めた。また、発達支援センターの医療相談やスタッフ派遣、伊丹特別支援学校のコンサルテーションも活用した。 ・年２回インクルーシブ教育・保育についての学習会を開催した。 ・インクルーシブ教育・保育についての職員アンケートでは肯定的な回答が９５％であった。 ・保護者支援については、その都度そのクラスの職員だけでなく、必要に応じて園のにいろ保育担当全員でも集まって相談して進めるようにしてきた。	・職員同士の情報交換、共通理解はよりよい支援に直結するので、引き続き計画的にかつ即時的に行っていく。 ・個別指導計画をもとに保護者と子どもの育ちについて共有する機会を引き続き年間に位置付けて設けていく。 ・今年度、発達支援センターに加えて、伊丹特別支援学校センターとも連携を図ることでさらに子ども理解が深まったり、よりよいにいろ広場運営につなげたりすることができたので、引き続き専門機関との連携を図っていく。 ・引き続き、年間で計画してにいろ広場を開催すると共に、Bブロックの園ににいろ広場についての情報を発信していく。 ・保護者や子どもへの支援については、さらに園内で理解が深められるよう、共通理解や研修方法を工夫していく。	・にいろ保育の取り組みを、保護者全体にも発信し、共に知り、共に育ちあえるよう取り組んでいく必要がある。 ・研修や会議を活用して保護者や保育者のインクルーシブ教育の資質向上を目指す。 ・今後も様々な関係機関と連携しながら、個々に応じた柔軟な支援を目指す。

学校関係者評価総括

こども園での時間は、子どもたちにとって人生の始まりであり、一番大事な時期。今後もさくらだいこども園の良さやカラーをわかりやすく発信しながら、教育保育の質の向上に努めてほしい。

次年度に向けた重点的な改善点

・さくらだいこども園のカラー（良さ・強み）を明確にし、園外に発信していく。

・一人一人を丁寧に見守り、チーム全体で保育の質の向上を図っていく。